「基本に忠実」な仕事を心がける

藤井さんは瓦葺き職人として、社寺を中心とした歴史的建造物の屋根の修復にも携わり、その仕事は高い評価を受けています。そこには職人としての誇りが息づいています。

瓦葺き職人 **藤井禎夫**さん

ふじい・さだお●1957年、埼玉県生まれ。高校生時代はスピードスケートの選手として活躍。高校卒業後、瓦葺き職人の認定訓練校へ進む。同校卒業後、現代の名工・加藤亀太郎氏に師事。現在は有限会社フジイ瓦工業代表取締役。社寺建造物を中心に多くの歴史的建造物の屋根の修復に携わる。東京都優秀技能者。一級かわらぶき技能士、瓦屋根工事技士、（一社）全日本瓦工事業連盟瓦屋根診断士などの資格を持つ。

思いがけず進んだ道 やがて「いい仕事がしたい」と思うように

――瓦葺き職人になられたいきさつを教えていただけますか。

藤井　高校生時代、わたしはスピードスケートの選手で、国体やインターハイにも出場していました。そんなこともあって、将来は体育の教師になろうと考えていたのです。ところが体調を崩し、大学の入学試験に失敗してしまいました。

　今後、どうしようかと考えていたときに、運送会社を経営し、瓦を取り扱っていた叔父が「瓦葺き職人にならないか」と声をかけてきたのです。叔父によれば、その当時は景気がよかったこともあって、瓦葺き職人の実入りは相当なものだというのです。

――それで関心をもつようになったということですか？

藤井　いや実はそうではないのです。私はサラリーマンの息子で、職人の世界なんて全く知りませんでした。また伝え聞く職人の様子なども、正直あまり好きではなかったのです。

　でも遊んでいるわけにはいかないと考え、そのころ設立された瓦葺き職人養成の認定訓練校に進んだのです。その訓練校の訓練期間は2年間で、全寮制でした。生徒たちの多くは瓦葺き職人の息子で、私とは全く違う環境で育ってきた人たちだったこともあり、その言動には違和感がありました。

――当初はあまり乗り気ではなかったようですね。

藤井　はい。そうはいっても、それまで知らなかった瓦葺き職人の世界に次第に興味をもつようになりました。子どもがまったく知らなかった大人の世界を垣間見るようなものでしょうか。

　また訓練校で講師を務めていた腕のいい瓦葺き職人の仕事の現場を見せてもらっているうちに、「自分もあのような見事な瓦を葺きたい」と思うようになったのです。訓練校を卒業し、現代の名工にも認定された加藤亀太郎さんに弟子入りし、そこで10年あまり修業をしました。

　独立するのはその後です。

――独立したてのころは、たいへんではありませんでしたか。

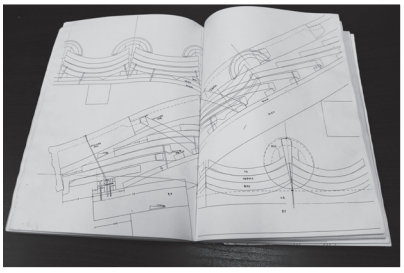
藤井　仕事をいただくのに苦労しましたね。こちらはほとんど何の実績もないのですから、やむをえませんが…。そうしたなかでたどり着いたのが、社寺の建造物の瓦葺きの仕事でした。

　社寺建造物の瓦葺きは一般家屋と比べ、とても高い技術が必要なので、街の工務店さんが担当するのはなかなか難しいのです。わたしはあえてそこに入り込んだのです。

現寸図通りに瓦を葺くために さまざまな工夫を

――仕事の流れを教えてください。

藤井　まず受注するにあたって、図面を見ながら金額が折り合うかどうかを検討します。これはどんな仕事でも同じでしょう。お寺の瓦葺きの場合は、それぞれの宗派によって瓦に入れる寺紋が違うので、それも考える必要があります。もちろんどんな瓦を選ぶのかも大切です。



▲現寸図を縮小して製本したもの。

▲寺社の瓦葺き屋根は、場所によって勾配も違い、ねじれもある。しっかり瓦を葺くためにはさまざまな工夫が必要であり、腕の見せ所でもある。現寸図通りに瓦を葺くことができれば一人前である。

◀現寸図を作成する藤井さん。
現寸図は瓦葺き工事の基本となる大切なもの。

受注した後は、大工さんや設計士さんと綿密に打ち合わせをし、現寸図と呼ばれる実際の寸法の図面を書かなければなりません。一口に社寺の瓦屋根といっても、さまざまな勾配があり、どのように瓦を配置するかを十分考え、現寸図を書くのです。

現寸図ができたら、その通りになるように、瓦を葺いていきます。瓦の葺き方もどこも同じというわけではありません。場所によって勾配も違うし、ねじれもあるので、さまざまな工夫が必要です。また雨漏れの心配がないように、雨水の流し方も考えなければなりません。

――現寸図が基本になるんですね。

藤井　現寸図を書くときは、どのような勾配をつけ、どんな瓦をどう配置するかなど、これから瓦葺きをする屋根のイメージができています。

現寸図は、昔は職人の勘に頼ってきたことをデータ化して、それを1枚の紙に凝縮したものといえるでしょう。それを見てここをこうすれば、こんな屋根になるということがわかるわけです。

――そうした仕事のなかで、どんなことを心がけていらっしゃいますか。

藤井　ひと言でいえば、基本に忠実に仕事をするということですね。瓦葺きの仕事は見た目の良さを追うあまり、えてして基本を忘れがちです。

例えば基本を忘れると雨が漏れやすくなってしまう。雨が漏れてしまうような葺き方は絶対にしてはいけません。また基本をはずれた工事をすると、長くもたせることはできません。

「基本に忠実に…」瓦葺き職人にとって、これが一番大切だと思いますね。

歴史的建造物の保存に携わる誇りと喜び

――どんなところにやりがいや面白さを感じていらっしゃいますか。

藤井　お寺や神社の建物は、これまでさまざまな修理を経ながら残されてきた、歴史的建造物です。これまでの瓦葺きの職人が精魂を込めて行った仕事を私が受け継ぐ。そして私の仕事を次の世代の職人が受け継いでいく。

こうして何百年もその建造物は残っていくのです。そうした仕事に携わっていることに誇りと喜び、そしてやりがいも感じます。

――仕事で難しさや厳しさはどのようなところにあるのでしょう。

藤井　この仕事はどうしてもお施主さんとわたしたちとの間に、元請さんが仲立ちとして入ってきます。そのため、私たちとお施主さんとの意志の疎通が円滑に進まないときがあります。そんなときは、工期が遅れないようにするために苦労しますね。

また現寸図ができたからといっても、だれもがそれに基づいて仕事ができるわけではありません。現寸図通りに仕事をする技術が必要ですが、その習得には人によってばらつきがあります。経験年数がそのまま腕の確かさを保証するというわけでもありません。現寸図通りに仕事ができるようになると、瓦葺きの仕事は楽しくて仕方がありませんね。

――これから瓦葺き職人を目指す人へのアドバイスをお願いします。

藤井　私の原点は、先輩たちの見事な仕事ぶりを見て「おれもあんなふうに瓦を葺いてみたい」という思いを抱いたことです。

より高い技術を身につけたい、より確かな腕をもちたいという強い思いが、本人の成長につながります。いつまでにどうなりたいかという仕事に対する将来図を描き、それに向かってまい進してほしいと思います。瓦葺き職人として評価されたいなら、より上を目指すという姿勢が大切ではないでしょうか。

http://www.koyoerc.or.jp/sigoto.html（雇用問題研究会ホームページ）
「しごとインタビュー」のバックナンバーがウェブサイトで読めます。